ゆうことみゆきの
なるほど
アイヌ文化エッセイ

ソンコ de ソンコ

Vol.121

アイヌ文化のことをもっともっと話したい!
本田優子と村木美幸の二人が、その魅力を交代で
執筆するソンコ(=お便り)形式のエッセイです。

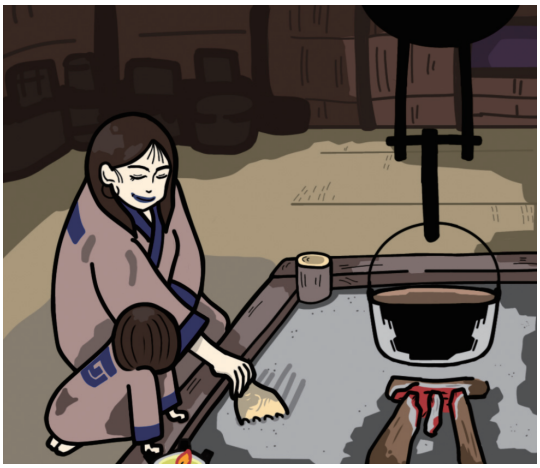
今月のテーマ

アペオイ(囲炉裏)

本田優子(札幌大学教授)

かつてのアイヌのチセ(家)はアペオイ(囲炉裏)を中心としたワンルーム。新築の際に、まず決めるのも囲炉裏の位置です。家がほぼ完成したら炉ぶちを組み、その内側の土を三十センチくらい掘ります。そして、落ち葉を敷きつめ、その上に小川から拾ってきたきれいな玉砂利を敷いて大地からの湿気を防ぐのだそうです。最後に、きれいな砂を上まで入れて完成。私がかつて暮らしていた二風谷では、ピオタ(火山灰)を入れたとのこと。囲炉裏は、一番身近で大切なカムイ(神)であるアペフチカムイ(火の女神)の寝床なので、丁寧に丁寧に作るのです。新しい囲炉裏に火を焚くのは、その家に火の女神をお招きする大切な儀式です。

以前、アイヌ文化を学ぶ授業で、囲炉裏の灰の中でシト(団子)を蒸し焼きにしている映像を流したことがあります。すると二人の女子学生が「食べ物を灰の中に入れるなんて汚い」という感想を書いてきました。たしかに清潔至上主義ともいえる現代の感覚ではギョッとするかもしれないけど、私は言いました。「灰は木が燃えた後の粉末だから全然汚くないよ。というか、炭だって木が燃え残ったものだけど、ご飯を炊く時に入れたら美味しくなるってさえ言われるでしょ」。それに、囲炉裏にはゴミはもちろん、髪の毛一本落としたらいけないとされ、いつも、櫛のような形をした木製のアペキライ(灰ならし)で、きれいに筋目を付けて整えているのです。



イラスト/山丸ケニ

囲炉裏の火を管理するのは、その家の主婦の役目。毎晩寝る前に、燠(おき)(薪が燃え尽きて赤くなったもの)の上に灰をかぶせます。でも、完全に火を消すわけじゃなくて、翌朝まで火種が残るように上手にかぶせないといけないんですって。これができないと一人前の主婦とは言えない。もし失敗して火を消してしまったら、火の女神を窒息死させたことになり、大きな災いが降りかかるとされてます(怖…)。だからといって、この役割を誰かと分担することはできず、必ず主婦が一人でおこなうとのこと。火の始末をおろそかにして火事が起きたりしたら取り返しがつかないでしょ。だから、ちょっとでも誰かに頼る気持ちを持ってはいけないんですって。昔も今も主婦って大変。 J

次回のテーマは「トッカリ(アザラシ)」
村木美幸(アイヌ民族文化財団常勤理事)
が担当します。

ウポポイ
NATIONAL AINU MUSEUM and PARK
民族共生象徴空間
JR白老駅から徒歩約10分

ウポポイPRキャラクター
「トゥレッポん」

イランカラプテ
「こんにちは」からはじめよう。

■本田優子(ほんだゆうこ):金沢市生まれ。札幌大学教授。北大卒業後11年間平取町二風谷に住み、アイヌ語講師を務める。
■村木美幸(むらきみゆき):白老町生まれ。アイヌ民族文化財団常勤理事。先住民族アイヌの一員として文化継承活動に努める。
■山丸ケニ(やままるけに):白老町生まれ。アイヌ民族文化財団職員。ウポポイでアイヌ語体験プログラムを担当する。